春夏秋冬

台湾徒然

第七回 四人の子供たちのために…

柳本通彦

最近の笑い話――。

「毎日お忙しいですね」

「ええ、四人の子どもたちのために大変なんですよ」

まあ、いまどきなんと子沢山？　と真に受けてはいけない。近頃台湾で、「四人の子どもたち」といえば、暗にお金のことを指す。最高額紙幣として長らく通用してきた、1000元札（約3500円相当）の表が、男女四人の子どもが地球儀を眺めている図柄に換わったからだ。日本でいえば、福沢諭吉さんの地位に当たる。

それまでは、ながらく蔣介石の肖像が居座っていた。髭面の独裁者から地球儀を囲む子どもたちへと、ずいぶん極端な様変わりである。それは、そのまま近年の台湾社会の変容ぶりを反映しているものといえよう。

戒厳令下の強権政治を脱して、革命的ともいえる民主化政策を断行した激動の90年代を乗り越え、政治的にも経済的にも安定した、台湾の人々にとって、日常生活上での最大の関心事は、やはり子どもの教育ではなかろうか。「子どもたちのために働いています」は決して冗談事ではないのだ。生活水準の高まりとともに、教育費は高騰しつづけ、台北では、月数万円もかかるバイリンガル幼稚園が当たり前になっている。あの紙幣にはお父さんお母さんの苦労が染み込んでいるのである。

一方、裏の図柄は、台湾最高峰の玉山を背景に鳥と野草という構図になっていて、それはそのまま環境意識の高まりを反映していよう。色といい図柄といい、ちょっと見ると、「こども銀行」の紙幣ような感じがしないでもないが、平和な台湾を象徴した改革とおおむね歓迎されているようだ。

1000元札がこのデザインになったのは、2000年の7月である。その後、次々に新札に切り換わっていき、この7月までの2年間に、新500元（図柄は少年野球）、新100元（孫文）が発行され、さらに新しく、200元札（蔣介石）と2000元札（宇宙科学をイメージ）が新設された。これで従来の紙幣がすべて衣替えされたことになる。

この一連の紙幣刷新のもっとも重要な改革は、あまり大きく宣伝されていないが、札の発行元の変更である。従来は、中央銀行が台湾銀行に委託する形をとっていた。すなわち、中国の台湾地区にだけ通用する特別な紙幣ということで、「地方銀行」格の台湾銀行が紙幣を発行していたのが、これからは中央銀行本体が発行する形に「正常化」した。

これも李登輝時代から着々と続けられてきた「台湾化」のなかの一つの政策転換であったが、大した反対もなくすんなりと落着した。

さらに興味深いのは、新500円札と20円玉に先住民がモデルとして採用されたことだ。前者はリトルリーグで世界を制覇した台東県の南王小学校、ピュマ族の児童で、後者は霧社事件（1930年に起きたタイヤル族による抗日闘争）の領袖・モーナルダオの肖像である。「族群」の融和を課題とする現政権が大胆に打ち出した少数派への懐柔策といえる。

中台関係が解決の糸口すら見えないなか、宙ぶらりんな台湾の模索はまだまだ続く。

独裁者からチビッコに変身。旧紙幣（上）と新紙幣（下）のデザイン